文化財ノート No.47

川崎街道と八王子道

稲城市教育委員会
生涯学習課
稲城市東長沼2111
☎042－378－2111
発行　2005. 1. 31

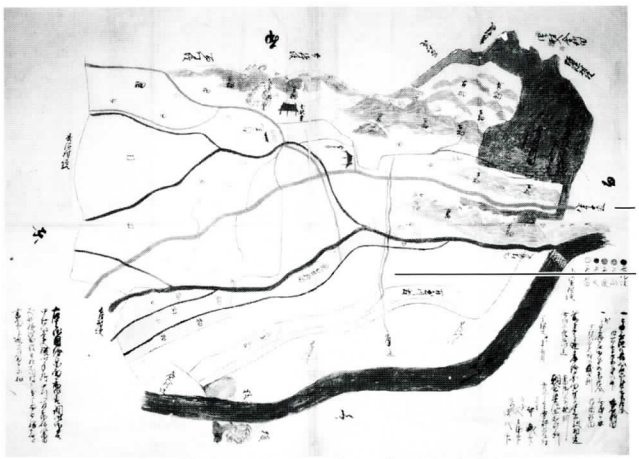
川崎街道の旧道と道標（矢野口・中島付近）

川崎街道は、川崎市から多摩川南岸を北上して、稲城市、多摩市、日野市を経て八王子市に至る幹線道路です。すでに江戸時代から市域の村々を横断する道路として頻繁に使われていました。特に矢野口村・長沼村・大丸村では関係が深く、江戸時代の絵図や古文書、道標などに「八王子道」「川崎道」として、記録されています。昭和初期には南側を並行するような形で新道が建設され、江戸時代からの旧道は南武線の北側に残り、昔の八王子道の面影を残しています。

江戸時代の八王子道の道筋は、現矢野口交差点付近まではほぼ現在の道筋と同じで、交差点の西側約300m付近から北側に曲がります。やがて南武線と交差して北側に抜け、点在する長沼村の集落の間を通って進みます。途中に大山道が分岐する三叉路があり、ここを右手に進むと大丸村に至ります。現大丸交差点の東側約80mのところで川崎街道の新道に合流します。ここから西側に少し進むと大丸村の集落になり、ここで右側に分岐すると府中道になります。八王子道は大丸集落から西側に進み、現稲城市立病院の前を通って瓦谷戸を抜けて連光寺村（現多摩市）に至ります。

江戸時代の八王子道の様子を資料から見てみましょう。当時の地誌である『新編武蔵風土記稿』（文政９・1826年完成）の大丸村の項には、「村内八王子道アリ、ソノ左右ヘ軒ヲツラネシ所モアリ　コノ往還ハ村ノ中央ヲ東西ヘ貫ケリ　道幅八九尺ハカリ…」と記録されており、八王子道と呼ばれた街道が村内を横断し、その道幅は８尺～９尺（約2.4m～2.7m）程であったことが判ります。天保７（1836）年作成の大丸村絵図（芦川家文書）には、八王子道が村内を東西方面に横断している様子が描かれており、大丸集落のところで北側に分岐する府中道が細線で描かれています。府中道とは今の府中街道のことで、

是政の渡船場を渡って府中宿に通じていました。八王子道の旧道には、現在でも江戸時代に建てられた道標を各所で見ることができます。矢野口の三谷（さんや）地域には、嘉永５（1852）年の馬頭観音塔が道標を兼ねており、石塔の側面には「東　河崎道」「西　八王子道」と刻まれています。江戸時代後期には八王子道　川崎道（河崎道）という名称が定着していたことがわかります。

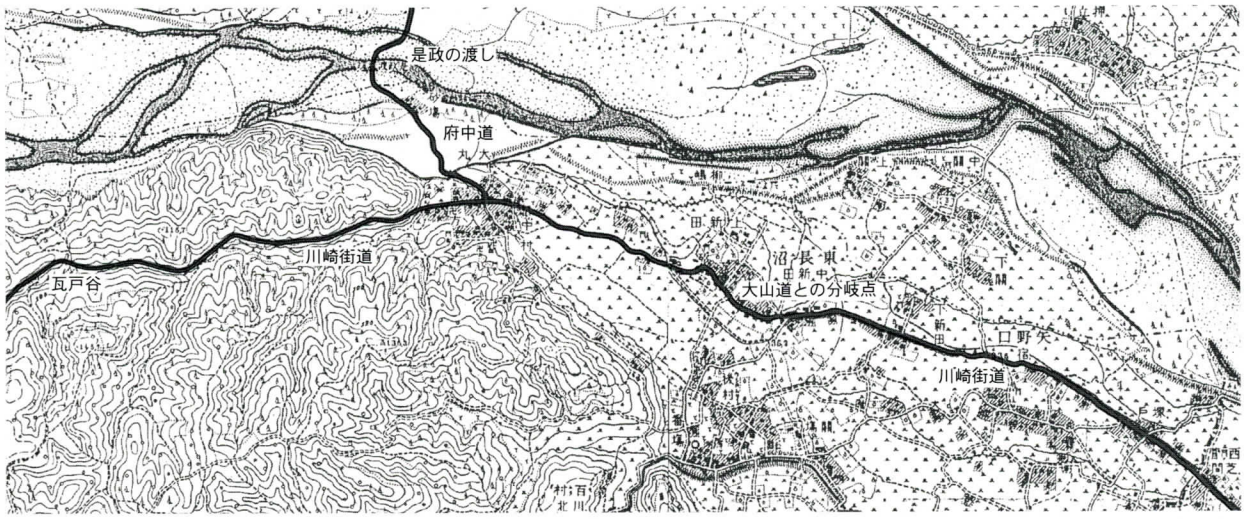


大丸村絵図（天保７年・芦川家文書）

明治19（1886）年作成の『地誌編輯取調簿』には、東長沼村、矢野口村、大丸村の項に、川崎街道に当たる記載がみられ、各々「八王子道」という名称で記載されています。その道幅は、大丸村・東長沼村のところで１間４尺（約３m）、矢野口村で２間（約3.6m）でした。矢野口村の道路の項には、「東ノ方菅村ヨリ通シ　中央ヲ経過シ西北ノ方東長沼村に連絡ス　行程平坦ナリ」と八王子道のことを記しています。

川崎街道・矢野口付近の新道（左）と旧道（右）

江戸時代から明治時代にかけてあまり変化のなかった八王子道は、昭和の初期に大きく変わります。この当時は、昭和初期に農村をおそった農業恐慌（きょうこう）により農産物価格が下落（げらく）し、稲城村でも深刻（しんこく）な状況となっていました。村では様々な救済事業を行ない、東京府の補助を得て村内の道路や三沢川の改修工事が行われました。このなかに昭和７年から９年にかけて行われた川崎街道の新道建設工事があり、現是政橋から矢野口交差点付近までの新道建設工事が、大丸の山を崩して行われました。さらに多摩村まで改修工事が完成したのは、昭和14年になってからのことです。矢野口から南武線の北側を通って大丸にぬけていた川崎街道は、昭和に入って矢野口から南武線の南側をほぼ一直線に通る新道に生まれ変わりました。さらに昭和30年代に入ると砂利道からアスファルト舗装（ほそう）の道路へ変わり、昭和40年代の後半からは、２車線道路から道幅28mの本格的な４車線道路へと変わるための拡幅工事が始まりました。大丸までの区間が全面４車線になったのは平成13年10月のことです。参考文献.『稲城市の地名と旧道』（稲城市教育委員会）



川崎街道（八王子道）の道筋（明治39年測図より作成）